

日本記者クラブ会報

本年度のクラブ賞

伊藤（産経）、阿武野（東海TV）両氏に

日本記者クラブ賞は、作品賞でなく、ジャーナリストの個人賞なので選考は容易でない。それもあって第1回は受賞者ナシだった。欧米先進国とは異なり、記者の流動性が低く、新聞、通信、テレビなどの報道各社はどこも原則、終身雇用の組織ジャーナリズムというのが特徴だ。だからこそ個人賞が存在する意義

が高いのだが、いざ選考となるとむずかしいことが多い。とりわけ放送は完全にチームプレーなのだから。

中国報道30余年の集大成

今回はすっかり決まった。推薦委員会（委員長 金指正雄会員）がまずお二人を有力とし、選考委員会（朝比奈豊理事）での投票でも1回目

目で2人は受賞に必要な3分の2を獲得して内定、4月20日の理事会で決定、発表の運びとなった。

伊藤正（68歳 産経中国総局長・論説委員）さんは、共同の編集局次長時代、クラブの会員資格委員会のメンバーだった。定年退社して、産経へ移るのを決めたあと、事務局へ来て「中国一本でまだまだやりたいか

禅に「一花開天下春」という言葉があるらしい。「一花」を「百花」に変えての麻生首相の揮毫（4.9）



第471号
2009年
(平成21年)
5月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
© 社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

ら」と顔を輝かせていたのを思い出す。76年と89年、2度の天安門事件を現場で取材した唯一の西側記者だ。特に2007年2月から1年間続けた連載記事「鄧小平秘録」が評価された。毛沢東路線を改革開放路線へ転換した、鄧小平の試行や苦闘を、膨大な公開資料と自身の取材で再構成することで、世界に台頭した中国の内実に迫った。

長年の中国報道で培った知識、経験、人脈が十分生かされていると称賛された。選考過程では、①構成員に優れ、重厚で、読ませる工夫もできている②価値観の押しつけがましきもなく、わが国の中国報道の質的な高さを世界に示す仕事だ、というような声もあった。

大勢に流されない独自の視座

阿武野勝彦（50歳 東海テレビ報道局専門局長）さんは、社会派ドキュメンタリーですでにいろいろな作品賞を受けている。今回は「裁判長のお弁当」や「光と影 光市母子殺害事件 弁護団の300日」で示

された、既成概念にとらわれない発想や手法、大勢に流されないジャーナリスティックな視座が評価された。

前者では裁判員制度を前に、初めてテレビカメラを長期に名古屋地裁内に入れ、裁判長に密着し、こんな発言も収録している。「われわれの仕事は検察立件が正しいかどうかを見極めることに尽きる」。事件や裁判の報道合戦に追われ、「裁判所」そのものが盲点のようになっていたせいか、裁判長の日常や検察主導がきわだつ司法の問題点を、淡々と描き出したことに対して、複数の選考委員が率直に「してやられた」という感想を漏らした。

後者では、報道が雪崩現象的に被害者遺族側の情報であふれる中で、加害者の弁護団サイドからみた裁判の争点を示し、報道における多様な視点を確保したと称賛された。

こういうことはそうあることではない。他にも優れた候補が推薦されている中で、選考委員会出席者の3分の2という高いハードルを、1回目で2人も突破するのは大変なことなのだ。

37回を数えるクラブ賞の歴史で、今回で3回目の絶大な祝福を受けたダブルでの受賞だった。

（専務理事 岩崎 玄道）

天皇会見

国民に開かれた
窓として

▶ 岩井 克己
(朝日新聞編集委員)



記者会見する天皇・皇后両陛下=4.8 (代表撮影)

4月10日の結婚50年を前にした記者会見で、天皇は皇后や支えてくれた人たちに感謝の言葉を述べようと、こみ上げるものを抑えきれず声を詰まらせた。重責を負いながら助け合い、たゆみなく務めてきた夫婦の年月の重みを感じた。

実はこの会見は当初、宮内庁がいったんは難色を示し、宮内記者会が押し戻してやっと実現したものだった。質問数も事前提出を許されたのはわずか2問。アドリブの関連質問も1問だけで打ち切られた。祝賀行事やカナダ訪問の準備などに忙殺されていること、7月にカナダ訪問前の会見、11月に即位20年の節目会見、12月にも誕生日会見が予想されることとが理由だった。

ここ数年、宮内庁は記者会見に厳しい制限を加えつつある。誕生日会見に限って見ても、事前提出質問、関連質問の数の推移は次のようにな

● 昭和天皇会見と同じ石橋の間で
感謝状を贈りたいとお二人が話した会見は、多くの人々の心を打ったのではないだろうか。市井からむかえられた美智子妃とともに新しい皇室像をつくってきた50年ともいえるだろう。あの戦争への深い思いと戦後民主主義への揺るぎない信頼が、お二人に共通し

ている。

文化勲章を受章したドナルド・キーンさんは、昨年、クラブの昼食会(12・17)で「日本人は、いまの天皇と皇后がいるので非常に幸せだと思えます」と語った。音楽、文学、歴史にいたるまで幅広い教養を有す、こういう皇室はちよつとない、と。

っている。

平成2年(1990) 事前9関連8(即位の礼終え皇后と)▽同3年 事前10関連5▽同4年 事前8関連9▽同5年 事前8関連2(還暦)▽同6年 事前4関連1▽同7年 事前3関連3▽同8年 事前4関連1▽同9年 事前5関連1▽同10年 事前5関連2▽同11年 即位10年会見があったため文書回答3問▽同12年 事前5関連1▽同13年 事前5関連2▽同14年 事前5関連1▽同15年 事前5関連1(古希)▽同16年 高松宮妃の喪中で文書回答2問▽同17年 事前3関連0(宮内庁が一方的に打ち切り)▽同18年 事前3関連1▽同19年 事前3関連1▽同20年(2008) 胃腸炎などで質問なしの文書感想。

「現人神」だった昭和天皇に宮内記者が初めて「ご会釈」を許され言葉交わしたのは昭和20年。天皇の

結婚50年会見に出席した岩井記者に取材記を、50年前のお妃選び、ご結婚の儀、ご成婚パレードを素材に佐伯、牧内、村尾、渡辺の4会員に短文を寄せてもらった。

会場は、日本記者クラブが初めて昭和天皇・皇后の公式会見(1975・10・31)を主催した「石橋の間」だった。

戦争責任追及の世論が強まる中、戦勝国メディアの記者と単独会見した後だった。昭和36年から定例的なものとなり、闘病中の同62年、最後となった会見でも昭和天皇は何往復でも質疑に応じた。

むしろ平成になって宮内庁が会見をしぶるのは、天皇が律儀に回答作成に精力を注ぐため、負担を軽減したいということや、高齢となった天皇がミスをして傷つきのを恐れているからだろう。平成12年(2000)、67歳の会見から天皇はペーパーを見ながら答えるようになって

近年のように、2、3問に制限されると勢い質問は包括的・抽象的となり、回答も一方的な読み上げめいたものにならざるをえない。戦後、国民に開いた窓が、再び閉じられるのではないかと恐れる。(敬称略)

(いわい・かつみ)

成し遂げた100%型人生

佐伯 晋 (朝日新聞社会部 当時)

ご婚約内定の少し前、正田美智子さんの父英三郎氏がぼつりともらした。「娘は、どちらかというと100%型の女ですね。とことんまで根をつめてやり抜かないと気が済まない」。そして「しかし、物事は80%ぐらいでやめておいた方がいいんじゃないか、と私は思うんだが」と続いた。聡明な美智子さんには、肉親のそういう気遣いがよく分かっていたはずである。

だがそれを振り切るように、美智子さまは100%型の人生へ踏み出し、しかもそれをやり遂げた。皇太子の懇望をついにお受けする決心をしたとき、同時にその覚悟を決めねばならなかったことであろう。

「結婚50年」記者会見での美智子皇后の穏やかな温顔。私には、そこに到達するまでの「やり抜いた」時代への無量の思いがこめられているように見えてならなかった。

が正式発表の朝、8ページ号外(朝日2ページ、読売半ページ号外)となつて



写真も思い出した。元共同通信員西井武好(代表はスチル部 現在93歳)「カメラマン人生でとても深い撮影でした」。

わずか10分間の秘儀

村尾 清一 (読売新聞社会部 当時)

皇居聖域の桜は満開。空は青かった。

1959(昭和34)年4月10日、午前10時、賢所で行われた皇太子

(25)と美智子さん(24)のご結婚

の儀は正味、10分間に過ぎなかった。

賢所正面の前庭から宮内庁記者の筆者

4月10日。

嵐のち快晴。

集合5時30分。

長靴にレイン

コートで青山

学院大学の現

場に向かう。

若いメディアだったテレビが新聞に対抗するには「花嫁の笑顔の映像」しかない。そこで青学グリークラブを待機させ、ハレルヤコーラスで花嫁の注意を引く。美智子さまに少し

ハレルヤコーラス作戦

渡辺みどり (日本テレビディレクター 当時)

女性記者の活躍

牧内 節男 (毎日新聞社会部 当時)

皇太子妃取材で女性記者が活躍したことがあまり知られていない。毎日で正田美智子さんが皇太子妃の有力候補との情報を掴んできたのは古谷系子記者(故人)であった。学習院の同窓会組織、常磐会などを担当。会長の松平信子さんに信頼されていた。昭和33年5月のはじめであった。美智子さんの担当が宮内庁記者になった後もくさらず、サイドストーリーをコツコツ取材した。それ

最近「知らずしてわれも撃ちしや春蘭(た)くるバミリアンの野にみ仏在(ま)さず」の歌を美智子皇后の作と知った。当時の取材の苦労は50年の歳月の重みに喜びと変わった。

がお二人の平安朝の晴れ姿を見たのは賢所に入入りされる際のわずか2、3分だった。でも不足は言えなかった。参列者全員(皇族、高官、正田夫妻、小泉信三氏、ヴァイニング夫人ら)がそうだった。ご両親陛下は参列しないうしきたりだった。

賢所の内々陣(アマテラスの象徴の鏡が置かれている)の黒光りする床の上で催された秘儀については、ここでは述べない。三々九度は、民間のようにお二人は盃を交わさない。オペラグラスを持参した者も秘儀は見えず、完全なしじまがあった。

でも長くカメラをご覧いただくという作戦だった。

午後2時30分、パレードは皇居を出発。渋谷の東宮御所に向かう。3時7分、馬車は青学の角をゆつくりと左折。私は思い切り右手を振ってキューを出した。若々しいハレルヤが流れる。美智子さまはその歌声にこちらを向かれた。作戦は大成功。昨夜来の嵐は奇跡の天皇晴れになつてた。

卵のむき身のようなピンク色、溢れんばかりの健康美の美智子さま。この先、私はこの方にこだわってゆけくことになる！輝くような笑顔にそんな予感があった。

就任あいさつにかえて

キューバのWBC

ハポン・カンペオンと祝杯



▼中井 良則

(日本記者クラブ事務局長)

カリブ海が深く切り込んだハバナ湾が目の前に広がる。青い海の向こう岸でハバナ旧市街(ビエハ地区)が亜熱帯の陽光を浴びている。

ラ・カバニー要塞に立った。1959年1月2日深夜、ゲリラの先鋒部隊を率いて、この要塞を占拠したのはチェ・ゲバラだった。ハバナを初めて見たアルゼンチンの革命家は何を思っただろう。

ゲバラの気分になったのもつかの間、笑い声が聞こえてきた。7、8人の男女が騒いでいる。物不足に苦しんでいたキューバの人たちも昼間から飲むようになったのか。近づく

と、案の定、ラム酒を回し飲みしてご機嫌だ。職場の祝い事だという。「どこから来た。チーナ(中国)か、ハポン(日本)か」。メキシコ市駐在のラテンアメリカ特派員としてキューバに通った90年代前半は、最初から「ハポン」だった。新聞記者最後の取材で15年ぶりに歩いたら「チ

ーナか」とまず聞かれる。

「ハポンだよ」。「オオ、ハポン！カンペオン」。破顔一笑とはこのことか。握手、抱きつく、握手。一杯やれ、とラム酒が回る。

ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)2次リーグで日本がキューバを破り、キューバは決勝リーグに進めず敗退したばかりだ。がっかりして、恨み言のひとつもいいたいだろうに、歓迎宴となった。日本はまだ優勝していないが「カンペオン」(チャンピオン)扱いだ。「イチコロ」「マツサーカ」と名前もしっかり覚えていた。

「キューバも強かったね」。お世辞をいうと「選手はいいんだが、監督が悪かった」。あれ。どこかで読んだ理屈だ。

フィデル・カストロ氏が共産党機関紙「グランマ」(3月20日)にWBC敗北について寄稿した。完敗を認め、日本と韓国をほめ、キューバ

の若い選手をたたえた。その上で、はつきり書いた。「チームの指揮はひどかったと指摘せざるをえない。相手は有能で常に変化しているのに、こちらは使い古した昔の手法が幅を利かせている」。

わが酔っ払い仲間もカストロ解説にのっとりキューバの用兵を批判し、日本を称賛したのか。

カストロ氏は病気で公職をしりぞき「コマダンテ」(司令官)を返上した。だが「コンパニエロ(同志)

フィデル」の肩書きで書き続けている。いつてみればコラムニストなのだが、もちろん国家権力の中枢そのものだから、単なる時事評論と読み飛ばす人はいない。発言の裏にひそむ政治意思を読み解く。そのすべて



ゲバラは絵葉書となって観光外貨収入に貢献している (ハバナのホテル・ナショナルで)

心得ていなければ、この国で生き抜くのは難しいだろう。とりあえず立場を合わせておけば安全だ、と考える人もいるかもしれない。

だが、そのひとことで、全員が右を向いたり、左に進むほどいまのキューバの人は単純ではない。50年間のトロピカル社会主義体制は人々をいささか屈折させたように思える。

それでも、というべきか、だからこそ、というべきか。野球ともなればみな情熱をたぎらせる。「ハポン・カンペオン」とハバナのあちこちで肩をたたかれた。カストロ氏の判断に従ったわけではあるまい。野球が好きだから強者をすなおに受け入れる。それがわかり「この次はクーバ・カンペオンだよ」と手を握り返した。お世辞ではなかった。

「ジャーナリズムの反対語はマンネリズムである」。毎日新聞で34年間、記者だったころ、折にふれて思い起こしたことはです。私たち日本記者クラブはほぼすべての報道メディアが加わり、日本を代表する独立したジャーナリスト組織です。ジャーナリズムがさらに元気を出すため、クラブが優れたニュースを発信する拠点となるよう力を尽くします。

ロンドンのスーパーマン？

欧州全土の経済危機を追う

▼是枝 智
(読売新聞社)

欧州の企業や金融機関、政府の経済対策などが記事になることはあまりなかった。単独では、世界経済への影響が比較的小さかったからだ。だが、状況は一変した。

2008年9月15日、米証券リーマン・ブラザーズが破綻し、世界経済を混乱の渦に巻き込んだ。そして、私のロンドン駐在生活を……。

広がる異常事態に言葉の壁も

9月17日、英銀ロイズTSBが、資金繰りに苦しむ英住宅金融最大手HBO Sを救済買収。28日には英中堅銀行ブラッドフォード・アンド・ビングレーが破綻した。その後、ベルギー・オランダ系金融大手フォルトイスや、独不動産金融大手ヒポ・リアル・エステートなどの経営危機が相次いで表面化。スイスのUBSなどにも波及し、危機は欧州全土に一気に広がった。

欧州の経済ニュースはすべて私の



担当。しかし、見たことも聞いたこともない金融機関ばかり。それでいて日本の大手行並みの規模を持つところが案外多い。通信社のニュースなどを手がかりに、複数の国で同時発生する情報を確認し、「危ない銀行」を追い続ける日々が始まった。言葉の壁には苦しんだ。特に、政府絡みの発表文はドイツ語やフランス語、スペイン語、イタリア語のこと

が少なくない。「武器」は翻訳ソフトのみというお寒い状況だった。

第2回金融サミット 首脳会談に臨む麻生首相と与謝野財務相(4・2) 読売新聞社提供

週末の破綻処理も多く、土日はほとんど休めなかった。ニュースを見落とし、真夜中に東京のデスクから電話でたたき起こされたことは一度や二度ではない。「スーパーマンじゃない」。愚痴がついて出る。

おかげで出張もままならなかった。通貨危機になった人口30万人余りのアイスランドを訪れることができたのは11月末になってから。

首都レイキヤビク周辺に足をのばし、話を聞いた地元漁師は、低金利の日本円とスイスフランによる外貨建てローンを組んでいた。だが、自国通貨クロナナの急落で、ローンの支払いが増えてしまったという。金融危機の広がりと、「遠い国」アイスランドを身近に感じた瞬間だった。

プレス対応も混乱のG20

金融立国の英国が受けた打撃は大きかった。支持率低迷にあえぐブラウン首相が、反転攻勢のきっかけにしようとしたのが、ロンドンでの第2回金融サミットだった。

サミットは4月2日、各国が2010年までに総額5兆ドルの景気刺激策を行い、世界全体の成長率を4

%押し上げるとの目標を盛り込んだ首脳宣言を採択した。

しかし、直前まで宣言案にあった「1900万人の雇用創出」の目標は、「積算根拠が乏しい」とする新興国の反対で削除され、混乱した。交渉関係者の話では、原案は、数字にこだわる英国の意向が反映した内容だったという。そうすると、他の目標の根拠も疑わしく思えてくる。

事務も混乱した。08年末には開催が決まっていたのに、会場入りに必要な記者証の配布は前日午後8時からと遅く、準備不足は明白だった。

当日は、記者を会場近くの地下鉄駅前に集め、バスで輸送する計画だったが、案の定、バスがなかなか来ない。「英国は取材してもらいたくないのか」との声が漏れた。同僚記者は会議終了後、1時間以上バスを待たされ、会場を出られなかった。

金融サミットが終わり、ロンドン生活は落ち着きを取り戻しつつある。だが、景気が悪いほど経済ニュースは増える。欧州の現状を見る限り、一息つけるのはまだ先のような。

これだ・さとし 1992年入社 98年経済部 財務省 日銀担当などを経て 08年6月からロンドン特派員・欧州経済担当

しおさき やすひさ
塩崎 恭久 元官房長官

▼迫力あるリーダーに脱皮期待

今後の自民党の中心となる有力候補であるのは間違いない。「国家ビジョンを掲げる政治を取り戻さなければならぬ」と強調し、「新・産業革命」や「安全・安心立国」など「5つの戦略」を示した。その中長期展望こそが今の自民党に欠けているものだ。だがそれを個人的な提言ではなく、どうやって党の政策にオーソライズしていくのか。

「端正」な政策通ではなく、「泥臭く」ても党内で主導権を握る力量が試されるポジションにきている。この日の発言だけでは、自民党再生の指導者としては物足りなさを感じた。

昨年末に

「速やかな政策実現を求める有志議員の会」を結成し、麻生首相の経済政策を批判してきたが、今回の追加経済



4・1(水) 昼食会 司会 影山日出夫
委員 出席 79人

対策については「議連の議論とダブっている」と容認。「反麻生」ではなく「親・国民」だと述べた。公務員制度改革でも首相判断に抵抗しきれなかったことを認め、「5月解散」の場合は麻生首相で戦うことも受け入れた。「麻生降ろし」に関して「党内のみんながどう流れていくかだ」という評論家的発言からは手詰まり感が浮き彫りになった。

小沢民主党代表の献金問題で状況が一変したとはいえ、自民党を取り巻く情勢は厳しい。次の衆院選で政権を維持できたとしても、自民党は世代交代を進め、党改革に取り組みなければならない。野党転落ならば、より厳しい自己改革を迫られる。いずれにしても中核を担うのは塩崎氏の世代だろう。

「自民党と民主党の違いが何か国民にも分からない。2大政党の『分かれ方』が問われる」と述べ、「(政党を)組み直して、民主主義を成熟させなくてはならない」と強調したが、それを主導する役割を果たすためには、迫力あるリーダーにもう一度むけることを期待したい。

共同通信編集委員 川上 高志

しおかわ のぶあき
塩川 伸明 東京大学教授

▼ロシア・ナショナリズム考察



旧ソ連の民族問題に関する大部の研究書や民族問題に関する一般書を最近、

次々と発表している塩川教授による講義は、慎重な語り口ながら、広い知識と深い洞察が印象に残った。

ソビエト民族政策について、少数民族の自決権が蹂躪され、ロシア化が推進されたとの見方がある。塩川氏は、こうした「裏返し」の公式論を退け、ソ連政権は現実には各共和国でアフアーマティブ・アクションや「土着化」政策を進めようとし、それが履行過程で新たな矛盾をもたらし複雑な側面を強調する。

実はこれが中心民族ロシア人の「逆差別意識」を惹起、ロシア・ナショナリズムを喚起するに至った。ロシアのような大国のナショナリズムが、被害者意識と表裏一体との視点は興味深い。

こうした視点からグルジア紛争に

4・3(金) シリーズ研究会「ユーラシア
旧ソ連地域の民族問題」 司会 石
郷岡建委員 出席 55人

ついて「ロシアはグルジアが憎いのでなく、米国がロシアを虐げられた地位に置こうとしている時に、米国のお先棒を担いでいる、という意識がある」と指摘する。

また、ロシアが独立を承認した南オセチアやアブハジア問題の展望については、米国の対口政策など、国際環境の変化が重要な要因になる、との見解だ。ソ連崩壊から再来年で20年。崩壊を歴史的必然とみるのが今や定説の感もあるが、塩川氏は歴史上の他の帝国同様、「特殊な条件がそろい、たまたま分解した」との持論を示した。

塩川氏は最後に、日本でのロシア観が「行き過ぎ」であり、心ならずも、「煮え切らない弁護をすること」があり、落ち着かない気分になる」と心情を吐露した。昨年夏までモスクワ特派員だった者として、大いに共感する。権威主義的な現体制の実態を正確に伝えつつ、「等身大のロシア」をどう伝えるか。ロシア報道のむずかしさをあらためて痛感した次第だ。

東京新聞外報部デスク

常盤 伸



大学では研究室が隣り合わせのお2人の専門は、神馬教授がコミュニケーションの保健、渋谷教授が保健政策。会見もミクロとマクロの視点から国

神馬 征峰 東京大学教授 (国際地域保健学)
渋谷 健司 東京大学教授 (国際保健計画学)

4・7 (火) 研究会「国家戦略としてのグローバルヘルス」 司会 宮田 一雄委員 出席 43人

▼知恵と声を生かした保健戦略

昨年7月の北海道洞爺湖サミットの重要課題だったグローバルヘルス (国際保健) に関し「具体的に何をすべきか」を継続して検討してきた「国際保健の課題と日本の貢献」研究会 (通称・武見研究会) が今年1月、検討結果をまとめた提言書「保健システム強化に向けたグローバル・アクション」を日本政府に提出した。保健人材、保健財政、保健情報、の3分野の提言のうち、保健人材を神馬教授 (写真Ⅱ右)、保健情報を渋谷教授が執筆している。

国際保健を複眼的に捉えるまたとない機会となった。同じ国際保健でも70

80年代のインタナショナルヘルスが「南の問題を北が解決してあげる」といったニュアンスなのに対し、21世紀に入って頻繁に使われているグローバルヘルスは北と南の共通点に注目し、「途上国の問題が先進国の問題でもある」との視点が強く意識されているという。

会見ではそうした説明の後、触媒としてのG8の役割、資金・人材・知識などを確保するための革新的方法の模索、人間の安全保障の観点の重要性、途上国の自助努力を促す学習プロセスなど、提言のポイントを紹介していた。

提言書は英医学専門誌「ランセット」に掲載され、途上国の開発援助や保健基盤強化に取り組む世界の専門家に注目されている。金融危機下の日本の戦略に関して言えば、資金貢献はもちろん重要だが、同時に「金がなくとも知恵と声があれば世界の評価はありうる」と渋谷教授が指摘されたのが印象的だった。

産経新聞編集局編集委員

宮田 一雄

麻生 太郎 首相

▼高揚感：落とし穴も？

大切なのは客観的な事実よりも気持ちの持ちようだ。そんなことを実感した会見だった。内閣支持率は上がったとはいえ、20%台をさまよっている。危険ラインの30%を下回っているにもかかわらず、首相は高揚していた。

この日打ち出した「未来開拓の戦略」は評価していいものだった。目の前の課題に対応することに精一杯だったが、「低炭素革命」「安心、元気な健康長寿社会」などをキーワードに、2020年までに日本が目指す姿を示した。今後の議論のたたき台には十分なり得るだろう。



高揚感を背景に「麻生らしさ」復活を思わせる会見でもあった。中国の女性向けの雑誌をかざし、「これ、誰？ 言えない年になっちゃった？ 香里奈って人です」「これ、知らない？ ほとんど今の時代に生きておられない

い方ですね。エビちゃんです」。

私自身は、一国の宰相であることとあやや香里奈、エビちゃんを知っていることに強い相関関係があるとは思われないが、このあたりに、いい意味でも悪い意味でも「麻生らしさ」があることは事実だ。

どんな中期構想を出そうが、選挙に勝たなければ「絵に描いた餅」にすぎないというところで、冒頭で衆院解散の時期を質問したが、これがまた例の如く麻生流。現場記者の総理大臣への質問の質が低いことを嘆きながら、「現役の諸君も、ああ、先輩を見習っただけなんだと思っ

て、残念な気持ちでした」ときた。私自身が言い返されたから言うのではない。支持率が少しずつ戻っているのは、目立った失言がないからだと思うだけに、今の程度で高揚していると、落とし穴が待っているようにも思ってしまう。

読売新聞特別編集委員

橋本 五郎

ほった つとむ
堀田 力

元東京地検特捜部検事

4・10(金)研究会「検察と政治」①
司会 倉重篤郎委員 出席 121人

▼国策捜査批判にきつぱり反論

柔らかな語り口調は「秋霜烈日」
検察バッジのイメージからは遠い。
激動期に育った昭和ひとけた世代。
ロッキード事件に腕振った花の特
捜検事。転じてさわやか福祉財団を
興し、活動や提言にたゆみない。

東京地検特捜部の小沢一郎民主党
代表の公設秘書らへの政治資金規正
法違反捜査。その後輩たちの仕事に



対する「国
策捜査」批
判に、氏は
温和な言葉
ながらきつ
ぱりと反論

する。また、規正法はとっかかりで
狙いは贈収賄立件ではないかという
見方にも「とても違和感がある。規
正法違反は軽い形式犯ではないし、
捜査のとっかかりでもない」とした。
それを一方的に、退官しても「検
察一体の原則」か、と皮肉ってはフ
ェアではあるまい。西松建設の摘発
で証拠を収集、解析、聴取し、迫る
時効を勘案しながら時系列的に見る
と、今回の逮捕に不自然さはなく、

順当な流れだと氏は言う。実務を知
り抜いた人だけに説得力がある。

さらに規正法は穴だらけのザル法
を改正で少しづつ穴を埋め、今日に
至ったものだと言調。主柱は透明性
の確保で、資金を国民の監視にさら
し、是非を判断してもらうことが趣
旨という。今回の内容は過去の摘発
事例と不釣り合いはなく、国民の多
くにも違和感はないとみる。

政治家個人への献金がやり放題だ
った時代は、その腐敗摘発には贈収
賄を暴き出すしかなかった。だが仲
間割れでもないと言面化はまれ。腐
敗を正すには、資金の流れを透明に
することが不可欠という論法だ。

氏の解説に筋は通っている。とは
いえ、捜査が政治情勢に影響したの
は事実。問をおかず自民側にもとみ
られたがすんなりいかず、はた目に
はスマートさに欠く展開になった。

特捜は自身に「雑念」なくとも、常
に政治とのかねあいで注目され、背
景を深読みされるのが宿命だ。

そこらへんの「つらさ」も次の機
会にもっと聞きたい。

毎日新聞論説室専門編集委員

玉木 研二

むらやま おさむ
村山 治

朝日新聞編集委員

4・14(火)研究会「検察と政治」②
司会 田崎史郎委員 出席 88人

▼検察リーク論は記者への侮辱

東京地検特捜部が小沢一郎民主党
代表の公設秘書を逮捕・起訴した西
松建設の献金事件は、検察権行使の
在り方に激しい批判を巻き起こし
た。総選挙を間近に控え、しかも次
の首相になる可能性もある小沢氏の
側近逮捕で民主党は失速状態に陥
り、政界の風景は一変した。

「政治とカネの問題に限らず、企
業の情報開示や食品表示などでも国
民に誤った情報を提供することを、
今の検察は重大な犯罪とみている。

虚偽情報を流すことは、今の自己責
任社会では「形式犯」ではなく、実
質的違法性があるという見方だ」

政界捜査の取材経験が豊富で、昨
年出版した『市場検察』が話題にな
った朝日新聞編集委員村山さんは、
政治資金規正法違反容疑で強制捜査
に着手した検察の意図を解説。事前
規制の護送船団方式が崩壊し、事後
チェック型社会が実現する中で検察
は捜査対象として「情報開示義務違
反」を昔とは比較にならないほど重
視しているという。

内閣官房副長官がオフレコ懇談で



「自民党議員
には波及しな
い」と話した
ことから憶測
を呼んだ「国
策捜査」について

「検察が国策に
沿って捜査するのは当然のこと。時
の政権が政敵を倒すために検察を使
うようなことはあつてはならない
が、もしあれば、それは恣意的な政
治捜査で、本来の意味での国策捜査
の対極にある。今回の捜査は内部告
発が端緒で始まっており、麻生政権
の意図とは無関係だろう」。

民主党を中心に噴出した検察リー
ク論には「権力の手先と言われている
のに等しく、記者にとつては最大
の侮辱。現場の多くの記者は地道に
取材している」。

一方で、村山さんは「誤解を恐れ
ずに言えば」と断った上で「税金を
使って公権力を行使する検察が捜査
状況を記者ひいては国民に説明する
のは当たり前。それを批判するのは
『検察の説明責任』をないがしろに
しかねず『国民の利益』にならない
のではないか」と言い切った。

共同通信社会部副部長 本多晃一

マクドウム・シャー・マヘムード・クレシ パキスタン外相

4・15(水) 記者会見 司会
宮田謙一委員 通訳 佐々江信子
出席 82人

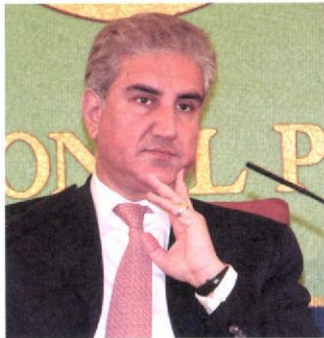
▼支援とテロ対策のリンク

「テロとの戦いなどの課題を解決するには政治経済的に安定したパキスタンが必要だ」。クレシ外相はこう述べて、パキスタン支援国会合の前に国際社会の支援に期待を表明した。今なぜパキスタン支援なのか。

アメリカは新たなアフガニスタン戦略を打ち出し、パキスタンをアフガニスタンと一体のものとして重視する方針を示した。背景には過激派の拠点がアフガニスタンではなく、パキスタンの国境地帯にあり、パキスタンの協力が欠かせないという事情がある。しかし、パキスタンは今破たん国家寸前の状態だ。国会はそのパキスタンを支援しようと日本政府が呼び掛け、初めて開かれたものだ。

会見でクレシ外相

は対テロ作戦について国境地帯に11万7000人の部隊を配備し、345億ドルをかけて進めていると指摘し、「テロ対策は単にアメリカが望



むからだけではなく、パキスタンの国益にもかなうことだ」として、作戦を強化する考えを示した。

支援国会合は結局、想定を上回る2年間で52億ドルの支援を表明し、国際社会全体でパキスタンを支えていく姿勢を示した。

ではこうした支援がテロ対策の強化につながるのだろうか。アメリカが軍事作戦を行えない以上、パキスタン政府に頼らざるをえない。やる気を起こしてもらうには経済支援の拡大なしには難しいだろう。一方国民が過激派に同情的で、対テロ作戦に反発していることも問題だ。国際

社会は支援とテロ対策をリンクさせ働きかけを強めていく必要があるし、パキスタンを支援を効率的に使い、テロ対策に真剣に取り組むことが求められる。クレシ外相の次の言葉に期待したい。「パキ

スタンはイスラム社会のモデルとなり、この地域の民主的な時代を率いていきたい」。

NHK解説主幹

山内 聡彦

はまだ 純一 東京大学総長

4・17(金) 昼食会 司会 今井環副理事長
普沼堅吾委員 出席 66人



▼「知の公共性」を求めて

東大新聞研究所教授をつとめ、情報法の研究者としてメディア界ではつとに知られる。プレスセンタも「第2のふるさと」と自認する。しかしオーソドックスを好む学問の世界では、自身の出身分野が「必ずしも正当な評価ではなかった」と振り返る。組織力学で言えば本流ではなかったかもしれないが、米国のオバマ大統領誕生になぞらえ「いわば学内マイノリティーのわたしを総長にした東大とは、実に恐ろしい組織だ」と実感した。

総長としてあらためて東大を俯瞰して、「巨大な森」を見る思いがした。学生総数2万8千人。教職員を含めると3万数千人を擁する。しかも東大が日本と世界に果たす学問的役割

と社会貢献への期待値を考えると、「実際の規模は数字以上のものがある」と感じている。

この巨大な森を動かす理念として、「知の公共性」を掲げた。メディアの自由と公共性を追求してきた研究者ならではの指針であろう。知識を共有することで快適な社会づくりをめざし、世界を担う「知」の拠点を確立したいと意欲を示す。

今年の入学式で「タフな東大生として成長してほしい」と新入生に呼びかけた。大学の国際化を促進し世界に「知」を発信すると同時に、世界からも未知の知識と活力を導入したい。そのための語学学習、国際経験、留学生との交流などを拡大する。そして卒業生が大都市だけでなく、世界の隅々でも活躍できるだけの知力と指導力を発揮できる「厚み」のある教育を提供したいという。

伝統的に東大生は公共奉仕の意識が強いが、何をすれば公共の役に立つのか見えにくい世の中になってきた。いまこそ人材の活力を引き出すリーダーシップを痛感している。

朝日新聞紙面審議会事務局長

嶋田 数之

もとほら
ひとし
本原 仁志 日本人材派遣協会理事長

4・17(金) シリーズ研究会「雇用問題」⑤ 司会 川戸恵子
委員 出席 48人

▼個人の能力向上のための仕組みを

ワーキングプア、偽装請負に派遣切り。雇用の不安定さを象徴する出来事が表面化するたび、批判の矢面に立ってきた人材派遣会社。「悪の代表のように言われるゲストです」との司会者の言葉に思わず苦笑しながら登壇した。



一面もある」と珍しく言及した。協会の非加盟企業

には法令順守が徹底されていない企業も多く、業界健全化に向けた取り組みに限界があることへ忤怩たる思いにもじませる。

過去最大規模の政府の経済対策では、雇用対策が柱のひとつに盛り込まれた。非正規社員の安全網拡充として、職業訓練中の失業者への生活費支給は確かに必要だ。ただ、長期的視点で求められるのは、個人が自らのスキルを鍛え、雇用される能力(エンプロイアビリティ)を高めるための仕組み作りである。

個人の能力に応じた、きめ細かい支援は国頼みではおのずと限界がある。収益環境の激変で、雇用確保さえ約束できなくなった企業に人材投資の余力はない。雇用不安が強まるなか、「各人のスキルに合わせた対応策を考えていくことが重要」との同氏の指摘は現実的。

そして、その一翼を担えるのは働き方の多様化を推進してきた人材業界。景気悪化で雇用政策の真価が問われるいま、業界は自らが担う役割の重さを認識するべきだろう。

日刊工業新聞東京支社編集部

神崎 明子

むなかた
のりお
宗像 紀夫 元東京地検特捜部長
中央大法科大学院教授

4・20(月) 研究会「検察政治」③
司会 川村晃司委員 出席 122人

▼検察の捜査を監視せよ



検察による西松建設事件の政界捜査をめぐっては、小沢一郎氏だけでなく、検察にも説明責任を求める声

が強いが、「説明を求められること自体、捜査が国民の信頼を失っている」と古巣をばつさり切り捨てた。

東京地検特捜部に通算12年間在籍し、リクルートやゼネコン事件で国会議員の汚職を摘発しただけに、小沢氏の公設秘書逮捕には「表のカネの話であり、以前なら在宅で処理するような容疑事実で驚いた」。

半年以内に行われる総選挙で、政権交代が取りざたされていた最中の逮捕。他に裏金があるのか、秘書が談合に関与したのか、とにかく次の展開があるとみていたら、何もなかったのが再び驚く。「これが政界を揺るがす事件なのかと、国民が疑問を持つのは当然」と手厳しかった。

西松側が小沢氏側に名前を隠して

献金をしたのは、東北地方で公共工事の受注を有利に進めるためで、突出した献金は実質的な賄賂だった。検察幹部らは声を大にして、世間にそう言いたい心境だろうが、「それなら秘書を逮捕する前に、西松側から献金を受けた政治家を全員調べておくべきだ」と切り返した。

「検事時代は耳にたこができるほど、厳正公平と不偏不党という二つの四字熟語を聞かされた」。それを聞き、5年前の日本歯科医師連盟事件での政界捜査が思い浮かんだ。

特捜部は当時、自民党の大物議員らに渡った違法な迂回献金を捜査の過程で精緻に裏付けた。賄賂のばらまきのような極めて悪質な事案だったが、事件にすれば政権党に大打撃を与えると考えた検察上層部は、捜査の現場に立件を断念させた。このときは巨悪を見逃したのである。政局に大きな影響を与えた今回の捜査との落差はあまりに大きい。

「検察の力はものすごく強い。正しく検察権を行使しているか、マスコミが見ないといけない」。それが宗像紀夫氏の締め言葉だった。

東京新聞社会部

杉谷 剛

たざき しろろ
田崎 史郎 時事通信解説委員長

4・22(水) 著者と語る「政治家失格」司会 倉重篤郎委員
出席 81人

▼オフレコ報道—葛藤と信念



政治記者 生活30年を振り返った新著『政治家失格』をテーマの講演だった。

会場の関心は小沢一郎人物論とオフレコを破る意味に集中した。小沢氏については、「同じ失敗を繰り返す人」「ロッキード裁判闘争を抱えた故田中角栄首相の姿にダブって見える」という言葉がもっとも印象的だった。

個人的には、小沢氏の人物論よりも、政治家のオフレコ情報をめぐる著者の葛藤の話が興味深かった。

オフレコは、「相手の了解なしには絶対発表してはならない」との報道モラルの立場と、「自分の知りえたことは何らかの形で伝えなければならぬ」との考え方が対立する。

そこで、著者は、①ひとつの政局が終わった時②取材対象が死亡した時—は、オフレコを明らかにしてもよいのではないかと、「オフレコ

にも時効がある」との考え方を提示する。

会場からは「オフレコは墓場まで運んでくれないければ、われわれの立つ瀬がない」と、訴える元社会部OBの声も出た。しかし、著者は、書けばそれなりの抵抗や風当たりが強くなるかもしれないが、「それでも書かなくてはならないこともある」と回答した。

オフレコ論にからみ、政治部記者は政治家との「サシの取材」が重要であるとも主張した。2人だけしか知らない会話をすべきだとの考え方でもある。どの社でも、政治部記者は、どこか秘密めいて、他部とはそれほど情報交流をしない雰囲気にある。権力中枢の機密に肉薄するとの使命感があるからなのだろう。

だからこそ、書かなければならぬと主張する著者に共感し、拍手さえ送りたいくなる。新聞記者は、書くことが仕事であり、書かなければ権力のインサイダーで終わってしまう。外見は穏やかで、優しい人物に見えるが、かなり信念の人であり、覚悟を知っている人とみた。

毎日新聞出身

石郷岡 建

■賛助会員の会
世界金融危機：NY報告

滝田洋一 日本経済新聞米州編集総局編集委員

ロンドンにおけるG20を取材後、一時帰国した日経の滝田米州総局編集委員は、「ボーン・上田記念国際記者賞」の受賞を前に、賛助会員に対しニューヨークから見た世界金融危機について語った。昨年9月1日着任直後、同月15日早朝



left (パランス・シートの右(負債)側)には健全な項目

Nothing right, Nothing left

がなく、左(資産)側にはなにに残っていない」という現在米国で流行しているジョークは、パランス・シート不況の深刻さと、にもかかわらず残存している市場関係者の心のゆとりと、滝田記者の市場への食い込みぶりを示しているように思えた。今回の危機解決についての日本の貢献(IMFへの1千億ドル拠出申し出)にも言及したが、G20が実はやがて米中のG2に集約されていくのではないかと鋭い指摘で話を結んだ。

多額の政府援助を受けている金融界と政界や世論との関係について質問も出たが、聴衆としては、現地での景気底打ち時期の見通しなど聞きたいことは山積していたのに、話も質疑も時間があまりにも短かったことは残念だった。

今回のような話は、賛助会員が独占すべきではなかったであろう。金融経済問題に明るい記者会員が必ずしも多くないクラブの現状を考えると、会員全員を対象に話してもらおう機会を設けるべきではなかったろうか。

特別賛助会員

緒方四十郎

4月8日 参加40人

ベルリンから送ったドイツ統一の社説

―ナチスの記憶と白い十字架と―



三露 久男

ジ・ジと音をたてて1枚のフ
ァクスが朝日新聞ベルリン支局の受
信機から流れでてきた。1990年
10月3日付一本社説のゲラだ。「新
しいドイツの生まれる日に」の主見
出し。「臨場感があって好評です」
という温かい担当デスクの添え書
き。私の論説委員時代のもっとも忘
れられない瞬間だった。

1980年代のなかばの3年半ば
かり、私はブリュッセルの特派員を
つとめた。その縁もあって、帰国と
ともに論説委員になってからヨーロ
ッパの問題を取り上げるときは、よ
く執筆のお鉢が回ってきた。とくに
89年のベルリンの壁崩壊・冷戦終結
のあと、疾風怒涛の勢いで進んだド
イツ統一の動きの社説は、私の専任
になってしまった。

一が実現、と確定したところ、ひとつ
のアイディアが浮かんだ。当日の社説
をベルリンから送れないか――。
いうまでもなく、社説は論説委員
室の合議に基づいてつくるのが建前
だ。従って執筆は国内ということに
なる。しかし、1年近くあの手この
手でドイツ統一の過程を書いてきた
私としては、ヨーロッパ史を画する
出来事の意義を現場で書きたい。東
京で書けば、これまでの社説の総ま
とめになりかねない。松山幸雄主幹
は、私の申し出を即答で許可してく
れた。

●「大ドイツ」復活をどう見るか

ドイツ統一は戦後ヨーロッパ秩序
の暗黙の前提であった「ドイツ分割」
の終焉、「大きなドイツ」の復活を
意味する。これをナチスに蹂躪され

た周辺諸国はどう見ているか。そこ
を書き込むことで新味を出したいと
思い、ベルギー、チェコ、ポーラン
ドなどを巡って取材した。その一環
として未見だったアウシュビッツ強
制収容所を訪れたことが、その後の
私の大学教師としての仕事につな
がろうとは夢想もしなかったが……。

周辺国取材を終えてベルリンに入
ったのが9月29日。東ベルリン地区
に開設されたばかりの支局に近いホ
テルに投宿した。すぐさま東西ベル
リンの「字になりそうな」ポイント
を見て回る。旧帝国議会議事堂（ラ
イヒスターク）、チェックポイント・
チャーリー（東西ベルリン間の検問
所）、「壁」の跡などみんな興味深か
ったが、私が「これでいける」と直
感したのは、シュプレー川のはとり
のフェンスに架けられた白い十字架

の列だった。東から西へ、川を泳ぎ
渡ろうとして射殺された脱走者の
「墓碑」である。

最後の犠牲者の日付は89年2月6
日だった。歴史の変わる時の流れの
速さ、9カ月後に起こる壁の崩壊を
予想だにできなかったことの無残さ
を思った。これが、この社説の書き
出しと締めくくりになっている。

●東西のプラグを統一して

取材はここまでと見きわめた私
は、ホテルにこもって一本社説のプ
ロットづくりと執筆にかかった。当
時はもう記事はワープロで打つのが
普通だった。私もいまさらエンピツ
では書けない。パソコン時代はまだ
だった。わざわざ電圧100ボルト
の重いワープロを携え、旅行用品売
り場でおなじみの各種の接続プラグ
や変圧器とともに持ち込んだ。

この旅の途中で西独のボンに寄っ
たとき、インフラなどは東独時代の
ままという東ベルリン地区で西側諸
国用のプラグが合うのか、との不安
にかられた。ボンの町の電器屋に行
くと、東ベルリンならこれかもしれ
ないと、東独規格のプラグの付いた
延長コードが出てきた。これを買っ
ておいたのは、私がついていたとい
うほかない。ホテルのコンセントは



「東」から「西」へ越境をはかり殺された人たちの十字架
左手前が最後の犠牲者 かたわらで「壁」のかげらが土産物として売られていた (1990年10月 筆者撮影)

記者時代のコネもまだ利く。ぜびゼミ生を連れて欧州旅行をしたい。極東の島国で国際

関係を習っていてもそれこそ机上の空論、百聞は一見に如かずだと勝手に興奮して一晩でツアー・コースまで決めてしまった。

旅のエピソードは書ききれない。が、学生たちに与えた感銘とシヨツ

みつゆ ひさお会員 1937年生

者 83年朝日新聞入社 経済部記

社 論説委員 91年論説副主幹 98年退

2007年退職 日本E.U.学会会員

まさに東独型で、西独+東独と2つのプラグを「統一」してワープロが動いたときの嬉しさは忘れられない。

時差を計算して書いた社説の原稿を送って、夜の統一式典会場のライヒスターク前広場へ出かけた。漆黒の夜空に北ドイツの秋の月が浮いている。ウンター・デン・リンデン通りからブランデンブルク門を通じて広場まで、大群衆で埋まっている。

午前零時の統一の瞬間を見ようと早めに着いた私は、ドイツ人の大男、大女に押しつぶされそうになっ

た。打ち上がる花火、国歌演奏、大歓声のなか、高さ40メートルのボールにするすると揚がる黒・赤・黄の統一ドイツ国旗。後ろの豪壮なライヒスタークの破風に「DEM DEUTSCHEN VOLKE」(ドイツ民族へ)と彫られた帝国時代の文字が強烈な照明を浴びている。周辺国の人々に聞いた大ドイツへの恐怖が実感できるような気がした。

朝日新聞を退社した私は、日本大学国際関係学部の教壇に立つことになった。奉職して4年目の2002年、学部はこれまでは国内に限っていた夏休み中のゼミ研修旅行の行き先を海外にしてもよい、という方針を打ち出した。ならば学生をアウシュビッツに連れていこう、というアイデアが瞬間にひらめいた。私が20年ばかり前にブリュッセルを拠点として取材に回ったヨーロッパのあちこちには、もちろん現代史の舞台はたくさんある。そこには友人・知人もいるし、

クは私の予想を超えていた。世界大戦・冷戦体制の残虐さと、平和維持への現実の努力を垣間見たこと。自分たちが英語のしゃべれない、分からない「国際関係学部」生であること、等々。帰国して数日間、くやしくて眠れなかった優等生もいた。

三露ゼミは私が退職するまで、(旅費を貯めるため)隔年にして計3度、同じ趣旨の欧州旅行をした。訪問地にベルリン、ブダペスト(ハンガリー動乱)、ウィーン(IAEA)などを組み合わせた。たくさんの方々、の好意あふれるお世話になり、歓迎を受けた。合わせて約40名の学生が、老ツアコン先生ひとりの引率で、軽い風邪以外の病氣、けが、脅迫・傷害、すり・盗難、紛失、迷子など1件のトラブルにも遭わなかった。

(13)

北朝鮮ミサイル発射

防衛省、エムネットに
翻弄された市当局

小川 浩義

(秋田魁新報社文化部)

北朝鮮は今回の「ロケット」打ち上げに当たって、国際海事機関（IMO）に、ミサイルが落下する危険区域の詳細な位置情報を通報した。1段目が落下するとされた日本海の危険区域の東端は、秋田、青森両県の日本海沿い県境付近から西に約130キロ。県境付近といえば、筆者が当時勤務していた能代支局管内のことだった。

北朝鮮がミサイル発射を予告していた4月4日。朝から、能代市の防災・危機管理室が置かれた同市総務課の部屋に待機した。最初は総務部長と次長、同室の2人の職員の4人



「ミサイルが発射された」との誤報に緊張感が高まった能代市職員たち

がいるだけ。午前10時すぎ、テレビのテロップで「北朝鮮が間もなく発射と発表」の報が流れると、広報車の担当者が招集された。

同10時55分ごろ、同室職員に、県庁からのメールで「発射されました」の知らせ。しかし、国と市を直接結ぶエムネット画面には何も表示されない。職員が県に電話を入れると「発射の事実あり。防衛省の情報だ」との回答。市は広報車の出動を決定した。

広報車を追い掛け、市の海岸線に広がる松林「風の松原」を散歩中の女性たちに話を聞いた。「（発射され

ても）大丈夫だろうと思って歩いていたが、広報を聞いたら急に怖くなった」と話す一方、「（発射から10分以上たち）もう飛び過ぎただろうからよかった」とも付け加え、複雑な表情だった。ところが、市役所に戻ってみると、発射というのは誤報だったという。女性たちの不安も安心もご破算である。正午過ぎには、今度はエムネットに「発射されたもよう」の情報。再び出動した広報車を追い掛けたが、車を出して間もなくラジオで「誤探知」とのニュース。「発射」をアナウンスしながら信号待ちしていた広報車のわきに車を寄せ、窓越しに「誤探知だそうだと教えた時の、市職員の情けなさそうな顔が忘れられない。

秋田県内は当時、知事選の真っ只中。翌5日は、管内を遊説する候補者を追い掛け、能代市の南側に位置する三種町を回っていた。午前10時半ごろ、もう一人の記者から携帯で「発射されたそうです」との知らせ。候補者は街頭演説でもミサイルのことには一言も触れなかったし、出迎えた支持者たちも平然としたものだった。まさに県境に位置する八峰町で取材に当たっていた記者による

と、役場内はテレビ局のカメラが詰め掛け騒然としていたものの、住民は平穏な様子だったという。

北朝鮮のミサイル発射が今回限りという保証はないだろう。政府はそのたびに迎撃態勢を取り、地方自治体も巻き込んで国民への情報伝達を図るのだろうか。

万一の事態への備えの大切さは理解できるにしても、情報が正確であつてさえ、だれもどこに逃げたらいいかも分からないではないか。そのとき、われわれ報道に携わる者はどんな姿勢で臨むべきなのだろうか。釈然としない思いばかりが募る2日間だった。

おがわ・ひろよし 1988年入社 能代支局を経て本社文化部

一口メモ 能代市・山本郡

2006年3月の市町村合併で、それまでの1市7町村から1市3町に再編された。北側の青森県境付近は、世界自然遺産・白神山地が広がる。同山地核心地域を擁する藤里町や、日本海も眺め渡せる八峰町からの登山、トレッキングが観光の目玉。JR五能線の快速列車「リゾートしらかみ」の旅も人気が高い。



マイBOOK マイPR

首相の蹉跌 ポスト小泉 権力の黄昏

清水 真人

(日本経済新聞編集委員)

なぜ自滅を繰り返すのか 安倍晋三、福田康夫と二代の首相はなぜたった1年で続けて最高権力の座を投げ出さざるを得なかったのか。麻生太郎首相も在任1年に遠く及ばないうちに3人目になりかねない土俵際まで追い込まれた。宰相たちの失敗の本質はどこにあるのだろうか。

3氏に先立ち、5年5カ月も「強い首相」を演じて見せた小泉純一郎氏の権力操縦と対比しながら、首相という最高権力のマネジメントの検証を試みる。それを通して日本の政党政治のシステムとゲームのルールを読み解き、「なぜ」「どこ」の答えを探すのが本書の狙いである。

(日本経済新聞出版社 1,995円)

こちら石巻 さかな記者奮闘記

高成田 享

(朝日新聞石巻支局長)

魚を見れば世界が見える! 定年を機に三陸の港町に駐在する「さかな記者」となり、漁船に乗ったり、地場の魚を食べたりしながら、漁業の

資源問題から食文化まで取材する日々の奮闘ぶりをまとめた。

そのなかで、豊かな海の恵を国民に与えてきた日本の漁業が、環境の悪化や乱獲で危機に直面しているのになど、どうしたらよいのか、漁業だけでなく地域問題にも焦点を当て、知恵をひねった。魚を通じての日本論もなっていると自負する。

(時事通信社 1,680円)

恵里子へ 結納式の10日後、ボリアで爆死した最愛の娘への鎮魂歌

鹿嶋 敬

(日本経済新聞出身)

結婚控えた女性を襲った想像を絶する悲劇 最愛の娘、恵里子は昨年3月、海外駐在を終えて帰国し、結納式を行った。その10日後、独身最後の旅に出たボリア・ウユニ塩湖で屋根にガソリンを載せて走る車同士の衝突で爆死した。なぜ悲劇は起きたのか。原因を探ると、世界的な観光地で無謀な運転を黙認してきたボリア政府の無責任さがほの見える。さらに娘の結婚に至る愛、キャリア形成、婚約者や家族の苦しみなども慟哭を抑え、書きすすめる。

最愛の娘への鎮魂の書であると同

時に、事故後に家族が直面する絆崩壊の危機にも触れた再生の書でもある。

(日本経済新聞出版社 1,680円)

夏の岬

植村 鞆音

(テレビ東京出身)

初めての小説に挑戦 5年まえ、サラリーマンを退職して著述業を目指した。幼いころからの憧れだった。66歳になっていた。処女作が伯父の評伝『直木三十五伝』(文藝春秋)、第2作が父の伝記『歴史の教師 植村清二』(中央公論新社)。3作目は初の小説に挑戦した。老人と若い娘の恋を描いた『夏の岬』である。生きる

ということは表現することだと思ふ。書くことは楽しい。出版後反省することが多いが、性懲りもなく、これから老人の恋を書き続けたいと思っている。(文藝春秋 1,800円)

新聞人 福澤諭吉に学ぶ 現代に生きる『時事新報』

鈴木 隆敏

(産経新聞出身)

現代の新聞ジャーナリズムのさががけ 半世紀も前に姿を消した『時事新報』が、実は現代も生きている。題号は昭和33年(1958)に消えてしまったが、時事新報株式会社は

休眠状態のまま産経新聞社がお預かりして今日も存続している。時事新報は慶應義塾、交詢社と並んで福澤諭吉の3大事業といわれる。独立自尊の慶應義塾が昨年創立150年を迎えたのを機に、「独立不羈」をうたった。日本一の時事新報の歩みを振り返ると、新聞各社の共通理念である「不偏不党」をはじめ、現代のメディアとジャーナリズムが学ぶべき事柄が数多く示唆されている。

(産経新聞出版 1,500円)

響き合うコラム

高村 壽一

(日本経済新聞出身)

記事にならなかった知名人・先輩の素顔 忘れかねるエピソードを収録した。仏像の衣紋からオートバイの流麗なデザインを発想した本田宗一郎さん。女房役の藤澤武夫さんは浄瑠璃常磐津に打ち込み、浅草公会堂で仮名手本忠臣蔵大序を熱演。「骨まで抜かれた。行革末だし」と慶大で講演中に倒れた鈴木永二さん。「タダ酒は飲むな」―父(大工棟梁)の言葉を守り通した佐々木久子さん。「定職はなかった。おかげさんで」と放浪歌人山崎方代さん。狼犬とともに北上した先輩布施道夫さん等々。

(草場書房 2,100円)

リレー
エッセー⑥私が出会った
石原裕次郎裕ちゃんの贈り物
生きるという宝物

◇尾崎 晃一

思うにあれが石原裕次郎さんからの
尊い「贈り物」だったのだ。

内村鑑三著「後世への最大遺物」(岩波文庫)を引き合いに出すまでもない「生きるという宝物」を身をもってファンに残してくれた。

28年前の1981(昭和56)年4月、解離性大動脈瘤(りゅう)という難病で東京・信濃町の慶応大学病院へ救急車で入院する。

2週間後の5月7日、容態急変。病果の上行大動脈瘤破裂の切迫兆候。主治医、井上正・外科教授の執刀で緊急手術が始まる。

成功率わずか3%。6時間33分に

及ぶ命を賭けた手術となった。

午後11時10分、石原プロ副社長、渡哲也と専務、小林正彦が記者会見。2人の顔は青ざめていた。

小林専務「ご報告申しあげます。井上先生は大手術後のため手が離せません。私が先生の言葉を伝えます。手術は予定通り正確に終了しました。



大好次郎裕石『裕次郎写真集』(まき子夫人監修)から
裕次郎の手術後の写真

振り生還をアピールした。

その年の夏は格別暑かった。来る日も来る日も病院通い。が、そこで「プレゼント」

屋上に出て上半身裸で日光浴をする彼に近寄り「ちよっと体に触らせてください」「ああいいですよ」

先ず腕に触れてみた。そして肩や背中、お腹にも。

期待通りの温かく豊かな手応えがあった。新聞記者として何よりもそれを確かめたかった。心が洗われる。

胸の手術跡には縦長のガーゼが貼り付けられていた。手術の際、「のどの下からみぞおちまで」レーザーメスで一気に切開。あばら骨を観音開きにして心臓近くの大動脈瘤を切除、血管を補強した。

最後に、あばら骨を閉じ、束ねられた極細のワイヤーで数箇所を縛り固定した、その傷跡だ。「ワイヤーを取り除くのは簡単な

手術だが記念に採っておくよ」

その後も順調に快復。入院から5ヵ月後には不死鳥のごとく甦り9月1日、大勢のファンや医師、看護師の見送りを受け世田谷区成城の自宅へ凱旋する。

1981年、日本列島は真夏の太陽で光り輝いていた。再起した主人公を祝福するかのようであった。

それから6年。1987(昭和62)年7月17日午後4時26分、永眠、肝臓ガン、52歳。

早いもので今年は二十三回忌。石原プロでは命日に合わせて何かを執り行うものと思われる。

裕次郎さんは映画「黒部の太陽」やテレビドラマ「太陽にほえろ!」「西部警察」、335万枚のヒット曲「銀座の恋の物語」など数多くの感動作をファンに送ってくれた。だが、珠玉の贈り物は「生きた証し」そのものと考え、闘病を紹介した。裕ちゃんの「後世への最大遺物」だ。



おさきこういち
会員(元サンス
ポ編集委員)

チャベス会見キャンセル騒動

1階玄関で出迎える時にスペイン語でどんなジョークを飛ばそうか、とひそかに作戦を練っていた。それなのに当日になってキャンセルだ。「そりゃないだろ」と振り回されたが「やっぱりね」と思ってしまったのも彼の人柄なのかもしれない。

ベネズエラ大使館に働きかけ、チャベス大統領の訪日記者会見を4月6日に予定していた。3日には大統領府の報道担当者が下見にきた。「本国に生中継したいぐらい」と意気込んでいた。「質問するメディアは5社だけ。会社と記者の情報を事前に知りたい」というので「それはできない」と返事した。

6日朝、大使館から「会見なし」とメールが入る。駐日大使に携帯電話で聞くと「残念だが」と歯切れが悪い。「質問者の事前通告を断ったからか」「それが問題ではない」「大統領本人の決定なのか」「そういうことです」。外務省に聞くと「ほかにもいろいろキャンセルしている。あれこれ粘ってみたが、昼過ぎ、中止を会員に伝えた。

大統領は翌日、ホテルで会見した。予定の正午に記者たちは集まったが延々と待たされ、本人が現れたのは午後3時だったと聞く。
(中井)

会議報告

2009年度日本記者クラブ賞選考委員会
(4・9 大会議室)

金指正雄クラブ賞推薦委員長の報告のあと選考に入り、伊藤正、阿武野勝彦の両氏を授賞者として理事会に答申することを決めた。

出席 朝比奈委員長、船橋、斎藤、住田、伊藤、神谷、島田、小櫃、玉川の各委員、滝鼻理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事。
第301回会報委員会
(4・10 小会議室)

新委員の富田恵新聞協会編集制作部長(旧・國府一郎氏)を紹介した後、5月号の編集について協議した。
出席 住田委員長、竹居、富田、村澤、渡辺の各委員。

第36回監事会(4・15 大会議室)
2008年度の会計監査を行った。
出席 松永、斎藤、黒木の各監事。
第380回会員資格委員会
(4・16 小会議室)

新委員の金子豊日本経済新聞編集局次長(旧・石川一郎氏)を紹介した後、5月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。
出席 斎藤(史)委員長、森、布施、金子、近藤、坂本、齋藤(雅)、川嶋、工藤の各委員。

第97回総務委員会

(4・20 小会議室)

08年度事業報告・同収支決算案・次期繰越収支差額処分案(次期繰越収支差額6582万7776円のうち、増加貨料積立預金に5582万7776円を積み増しし、1千万円を次期に繰り越す)を決定した。

出席 朝比奈委員長、斎藤、住田、神谷、島田、島居の各委員、滝鼻理事長、宇治、今井の両副理事長、岩崎専務理事。
第469回理事会
(4・20 大会議室)

①08年度事業報告・同収支決算案を次期繰越収支差額処分案とあわせて総務委員会案通り承認し、第74回総会に上程することにした。
②09年度日本記者クラブ賞を、選考委員会(朝比奈委員長)の答申通り、伊藤正、阿武野勝彦の両氏に贈ることを決定した。

③第19期(2009・2010年度)役員構成社を、役員選出委員会案通り決定した。

出席 滝鼻理事長、宇治副理事長、岩崎専務理事、朝比奈、斎藤、住田、宇佐美、土山、岩瀬、皆川、小野寺、縣、神谷、島田、渡辺、藤延、田中、島居、梅田の各理事。松永、斎藤監事。

第470回理事会(書面)

左記の理事交代を了承した。
福井新聞社

(新) 奥村正昭 東京支社長
(旧) 斎藤正幸
第386回企画委員会
(4・24 宴会場)

新委員の坂東賢治毎日新聞外信部長(旧・中井良則氏)、原田亮介日本経済新聞編集局次長(旧・長谷部剛氏)を紹介した後、司会を担当した委員が行事を報告し、今後の企画やゲスト候補などを協議した。

出席 船橋委員長、小此木、宮田(謙)、坂東、橋本、中井(康)、脇、原田、高畑、宮田(二)、田崎、影山、川戸、川村、石郷岡、高橋、長沢、藤井の各委員。

法人会員代表変更

長崎新聞社
(新) 馬場宣房 報道本部長
(旧) 本村忠廣
沖縄タイムス社
(新) 長元朝浩 取締役論説委員長
(旧) 岸本正男
日経CNBC
(新) 池田俊作 代表取締役社長
(旧) 野村芳顕

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■HAPPY NEWS 2008表彰式

ハッピーな気持ちになった記事とその感想を募集するキャンペーンの表彰式が行われた。日本新聞協会が2004年から行っているもの。大賞は大分県の川野智子さん。阪神大震災で亡くなった兄のランドセルを、震災後に生まれた弟が受け継いだという大分合同新聞の記事だった。また、5周年を記念して設けられた「HAPPY NEWS PERSON特別賞」が北京五輪銅メダリストの朝原宣治さんに贈られた。プレゼンターはタレントの眞鍋かをりが務めた。滝鼻卓雄審査委員長は「応募の半数以上は若い人からだった。若者がしっかり新聞を読んでくれている」とコメントした。その他の受賞作など詳細は協会のウェブサイト<http://www.readme-press.com/>で。(4.2 10Fホール)

■「言語力検定」を開催

文字・活字文化推進機構(福原義春会長 <http://www.mojikatsuji.or.jp/>)が今秋から行う「言語力検定」について発表した。OECDのPISA学力調査で要求される読解力の向上を目指すもの。第1回は、中学・高校生レベルの難易度の3、4級のみが行われる。福原会長の趣旨説明の後、問題作成者代表の有元秀文・国立教育政策研究所研究官は「日本の生徒は自由記述が多いPISA型読解力テストを苦手としており、特に、明確な根拠にもとづいて自分の意見を言うことができない」と指摘した。(4.2 宴会場)

■佐藤優氏講演

千代田プレスクラブ(今井久夫会長)で、佐藤優氏が北方領土問題とこれからの日ロ関係について講演した。(4.7 大会議室)

■農政ジャーナリストの会 特別研究会

政府の追加経済対策発表(4/10)を前に、西川公也・自民党農業基本政策委員長が農林分野における対策について解説した。主催=農政ジャーナリストの会(合瀬宏毅会長 <http://www.jaja.cside.ne.jp/>) (4.8 大会議室)

■日本産婦人科医会 記者懇談会

日本産婦人科医会(寺尾俊彦会長<http://www.jaog.or.jp/>)の竹村秀雄副会長が「日本の分娩にかかわる地域格差について」のテーマで話した。(4.8 10Fホール)

■講演「東アジアの戦争シナリオ」

アジア問題懇話会で、村井友秀・防衛大教授が東アジア情勢についての分析を語った。(4.11 大会議室)

■全国新聞東京営業部長会 総会 懇親会

地方紙45社の東京支社営業部長の会。総会で2008年度の活動、会計報告が行われた後、広告会社幹部なども招き懇親会を行った。(4.14 10Fホール)

■辺真一氏による北朝鮮情勢分析

未来をひらく日本委員会(尾畑雅美会長 <http://www.nihoniinkai.com/>)が、4/5のテポドン発射を受けて開催した。「コリア・レポート」の辺編集長が発射の背景、意図や後継者問題について解説した。(4.16 10Fホール)

■最近の中国情勢について

日本外交協会(平沼赳夫会長)で、垂(たるみ)秀夫・外務省中国モンゴル課長が講演した。(4.20 宴会場)

■帝人記者発表

帝人の大八木成男社長が会見し、構造改革と中長期経営戦略を含む経営基本方針を発表した。(4.27 宴会場)

■南アフリカ「自由の日」レセプション

南アの祝日の一つ「FREEDOM DAY」を祝うレセプ

新しいOB会員

●会員インタビュー●

寺尾俊彦(てらおとしひこ)

日本産婦人科医会会長

毎月記者懇談会を開催



「産婦人科医会」の会員は約1万2000人。母体保護法による指定医師であることが会員の条件であり、そのためには最低5年以上の経験が必要になる。生命に関わる仕事をするため、医師の中でも高い見識が求められることの証だ。

その産婦人科医会が2年前から月に1度、クラブでプレス関係者との懇談会を開いている。会長の寺尾俊彦氏は07年からクラブの特別賛助会員だ。

記者懇談会を始めた当時は、福島で女性が帝王切開手術中に死亡し、執刀した医師が逮捕・起訴されたことで、社会からの逆風をモロに受けていた。社会の声を聞き、理解をしてもらうにはプレスとの会話が重要だと考えた。「1回目の会では参加した記者の皆さんから、自助努力が足りない、と厳しく攻められました。エラい会を始めたなあ、というのが正直なところでした」。

以後、毎回テーマを設けて、周産期医療をめぐる問題を説明し、記者から意見を聞いてきた。今では記者の理解を得られるようになってきたと感じているという。「メディアも社会も、我々に目を向けてくれるようになった。何よりも記者の意見を聞くことができるのが最大のメリットです」。会はずべてオン・ザ・レコード。「共同通信が毎回配信しています。記事にするだけの内容にしなければいつも考えています」。寺尾会長は浜松医科大学の学長でもあり、この日も終了後トンボ返しをした。(河野)

ションを駐日大使館が開催し、約350人が参加した。この祝日は、1994年4月に、全人種が参加しての総選挙が初めて行われたことを記念したもの。(4.27 10Fホール)

■「優良放送番組推進会議」設立記者会見

民放番組に関心を持つ大手企業26社が設立する有識者会議が会見した。番組に関する調査への協力と、その結果の広報を活動の柱とし、優良番組の増加を目指すもの。委員長には有馬朗人・元文相が就任し、月尾嘉雄・東大名誉教授が事務局長、塩川正十郎・元財務相が顧問を務める。<http://good-program.jp/> (4.28 大会議室)

■岸井成格氏講演

世界平和文化交流会(吉川稲美会長)で、毎日新聞の岸井成格特別編集委員が「劣化著しい“政治”と“建国の時”」のテーマで講演した。(4.28 宴会場)

■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。渡辺周・民主党副幹事長(4.1)、野田毅・元自治相(4.8)、玄葉光一郎・民主党衆議院議員(4.15)、渡部恒三・民主党最高顧問(4.22)。

ホールご案内

●日経ホール●

♪ 6 / 27 サイレント映画「オペラ座の怪人」と
フランス八重奏団による生演奏 サイレント映画
と生演奏の競演 (¥6,500)

♪ 7 / 7 オペラ「フィガロの結婚」 日本語オペ
ラ劇団こんにゃく座公演 (¥3,500)

問い合わせ: 03-5281-8074

<http://www.nikkei-hall.com/>

●王子ホール●

♪ 5 / 27 デヤン・ラツィック ピアノ演奏会
スカルラッティのソナタほか (¥5,000)

♪ 6 / 11 トリオ・ディ・クラローネ
クラリネット・ホルン・ピアノのトリオ
がシューマンの名曲を演奏 (¥6,500)

問い合わせ: 03-3567-9990

地下鉄銀座駅徒歩1分(王子製紙ホール)

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報をご紹介
します。

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉
富
カクテル

5月はオレンジの香り

今月のカクテルは「ロードス
ター」。オレンジリキュール、オレ
ンジキュラソー、オレンジジュースなどオ
レンジ風味の飲みやすいカクテルです。

和
食

伊勢海老の懐石膳

◆突き出し三種盛り、刺身・伊勢海老姿造り、
焼き物・鮎塩焼き、焼き合わせ・伊勢海老具足
煮、揚げ物・穴子と豆腐の煮おろし、食事・伊勢海老味
噌椀、季節のフルーツ (5,250円 6月26日まで)

洋
食

牛ホホ肉のシチューコース (昼・夜の部)

◆カツオのカルパッチョ バルサミコ酢ソー
ス、牛ホホ肉の赤ワイン煮込み パスタ添え、
チェリートルト、コーヒーまたは紅茶 パン (2,980円
6月5日まで)

寄贈書

民放連 放送基準解説書 2009 日本民間放送連盟
防衛ハンドブック平成21年版 防衛省大臣官房広報課
三生三世 中国・台湾・アメリカに生きて 藤原書店

招待券

開港5港と新聞 日本新聞博物館

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3 5 0 3 - 2 7 2 3	3 5 0 3 - 2 7 2 5
洋食レストラン (10階)	経 理
3 5 0 3 - 2 7 6 6	3 5 0 3 - 2 7 2 8
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3 5 0 3 - 2 7 2 4	
受 付	会見申し込みアドレス
3 5 0 3 - 2 7 2 1	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3 5 0 3 - 2 7 2 2	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長=住田良能

委 員=石田昭彦 上村幸治 竹居照芳 富田 恵
枇杷田裕 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり

連 絡=長谷川和子 本庄五月

(電 話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

5月29日に記念講演と会員懇親会

すでにご案内のように、5月29日(金)午後4時半か
ら、詩人で作家の辻井喬氏を迎え、10階ホールで総会記
念講演会を開催します。演題は「21世紀の日本文化」で
す。引き続き、5時半からは9階宴会場で、本年度クラ
ブ賞受賞者の伊藤正・産経新聞中国総局長兼論説委員と
阿武野勝彦・東海テレビ放送報道局専門局長を囲み、
会員懇親会も行われます。準備の都合がありますので、
出席を希望される方はお申し込みください。

出席申し込み FAX03-3503-7271 TEL03-3503-2722

電子メール kaiken@jnpc.or.jp

開港5港と新聞 日本新聞博物館 (5/16~7/20)

博物館のある横浜が6月に開港150周年を迎えるのを機
に、日米修好通商条約によって開港した5港の新聞6紙(北
海道新聞、函館新聞、神奈川新聞、新潟日報、神戸新聞、
長崎新聞)の協力で企画展が行われます。招待券をご希
望の方はクラブ受付へ。

<計報>

佐久間央会員(個人D・日本経済新聞OB、89歳)が
4月12日老衰のため、大山晃人会員(個人D・NHKOB、
75歳)が同日心不全のため逝去されました。謹んでお悔
やみ申し上げます。

<会員現況> 法人会員 142社 基本会員 781人

個人会員 1,560人 法人・個人賛助会員 68社 174人

特別賛助会員 81人 名誉・功労会員 9人

計 210社 2,605人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」: 4月の新規掲載

●益川敏英 ノーベル物理学賞受賞者「ぼくはどう
して科学者になったのか」(2009. 3. 9)

今後の行事予定 (4/30現在)

5. 15 (金) 14:00~15:30 (10階ホール)
シリーズ研究会「雑誌・ネット・報道」①
佐野真一氏
5. 18 (月) 16:00~17:00 (10階ホール)
ヘデゴー デンマーク気候・エネルギー相記
者会見
5. 19 (火) 13:30~15:00 (10階ホール)
シリーズ研究会「オバマのアメリカ」⑥
上坂昇 桜美林大学教授
5. 22 (金) 15:00~16:30 (10階ホール)
シリーズ研究会「雇用問題」⑥
佐藤博樹 東京大学教授
5. 25 (月) 12:00~14:00 (10階ホール)
緒方貞子 JICA理事長昼食会

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープで
お知らせしています。

写真回廊

撮影 堀 英治 (ほり・えいじ・朝日新聞社写真センター)

あはれ花びらがれ

水際にせり出すような桜木の連なりから、咲ききわまった花びらが吹雪のように舞い続ける。水面いっぱいを覆った薄紅の片があちこちに花筏を結んで、春先の陽ざしに揺れる。

千鳥ヶ淵の眺めは足早に移ろい、すでに5月の連休の喧騒を過ぎて初夏の旺盛な緑の静寂のなかにある。
春が巡れば桜に來し方行く末を託すのが

この国の心の習いとはいえ、底の見えない不況とその先の不確かな明日に重ねて眺めたこの春の桜は、格別に先々まで人々に記憶されよう。

海の方こうからやってきた「百年に一度」という金融危機の直撃を受けて少なくない人が仕事を失い、安穩な日々の暮らしの足元が揺らいだ。

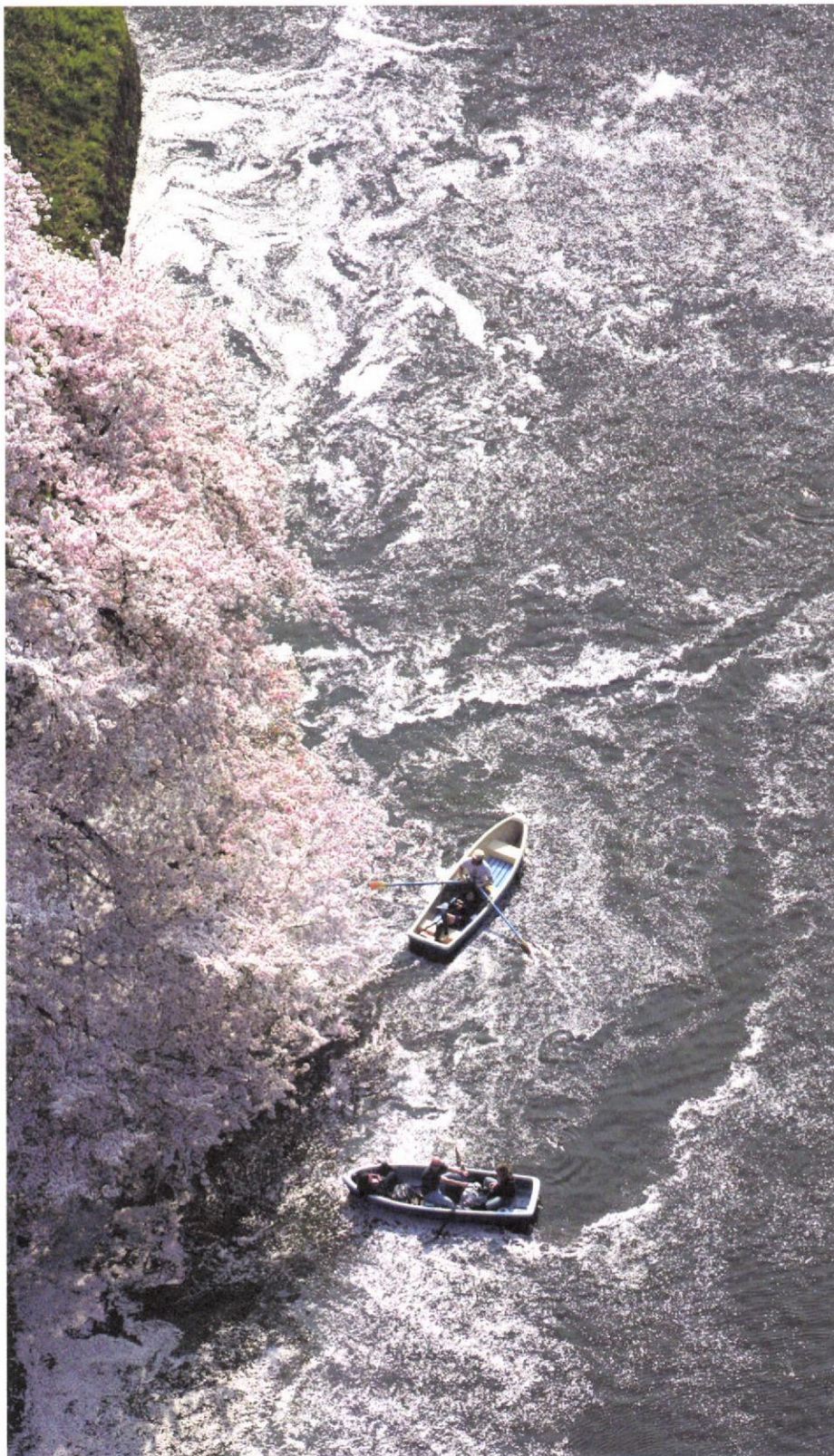
トヨタやソニーといった世界に冠たる看板企業が軒並み失速するかたわらで、政権党は国民に「定額給付金」というパンと自

動車や家電などの消費に補助金などの優遇政策で取り繕おうとする。借金の前倒しの国債の乱発による15兆円もの財政支出で、街には束の間の花見酒の気配さえある。

あはれ花びらがれ／をみなごに花びらがれ／をみなごしめやかに語らひあゆみ
(三好達治『梵(いし)のうへ』)

花が散り、深まる緑がそんな時節の無常をかきたてる。

(柴崎 信三)



桜色に染まる千鳥ヶ淵をヘリから空撮 =4・6